

ルソーの「ナルシス序文」について

(Rousseau, On "préface de Narcisse")

橋 本 三 太 郎

目 次

- (一) はじめのことば
- (二) 「序文」の成立
- (三) 「序文」執筆の動機
- (四) 「序文」の内容

(一) はじめのことば

ルソー自ら自己の主要著作の一つに算えあげていることから知られるように、「第一論文」（学問芸術論）は、思想家としての彼の地位を決定的たらしめた最初の著作である。ヴァンサンヌへの途上、彼は「突然の靈感」によっていくつかの基本的観念を啓示されるが、この基本的観念を中核としてその著作活動が展開される。「学問芸術論」はそれを導くいわば一つの壮大な序曲であった。しかして「学問芸術論」から「不平等論」に至る彼の初期における社会政治思想の発展を形成する貴重な著作の一つが「ナルシス序文」である。このことは彼が懺悔録の中で、「この序文は私の自慢の文章の一つであり、その中で今までよりも強く私の主義を明らかにしておいた。そして間もなく私はより重大な著作（「不平等論」を指している）の中においてこの主義を十分に説く機会を得た」（Confessions, Oeuvres, I, p. 202）と語る言葉によっても明瞭であろう。

このように「ナルシス序文」は、「学問芸術論」と「不平等論」との中間にあって両者を媒介していると共に、それは内容からいって「学問芸術論」と一

体をなすものであり、したがって「学問芸術論」理解のためにも看過することのできない作品である。筆者は、ルソーの教育論の全体構造と本質は彼の政治哲学ないしは社会哲学の背景なしには把握できないと見る立場から、先に(「人文社会」, 1957, 11号)彼の著作を一貫する「基本的意図」をさぐったが、本稿はそれと関連して筆者の組織的なルソー研究の一環をなすものである。

㊦ 「序文」の成立

「ナルシス序文」は、ルソーの「ナルシス」(Narcisse, on l'Amant de soi-même) と題するコメディに附せられた序文である。「ナルシス」執筆の時期はつまびらかではなく種々の異説が認められる。例えば、ミュッセパテ(Musset-Pathay)は1734年であるとし、デュクロ(L. Ducros)によれば1738—40年の間である。モーリィ(J. Morley)は18才の時書いたと見ているが(Rousseau and his Era, 1923, vol. I. p. 207) これはルソー自身「序文」の中において18才の時(1730年)の作であると述べている(Narcisse, Oeuvres, III. p. 192) ことによったものであろう。しかしこれは明らかに誤謬であり、懺悔録には「18才の時書いたといったのは二、三年ごま化している」(Oeuvres, I. p. 61) と述べて自らもそれを訂正している。ジャンベリィに来てから書いたという彼の言葉からすればそれは1733, 4年(21, 2才)頃の作であると推量される。

何れにしても「ナルシス」は彼の若き日の作品であり、彼はこれに対してなみなみならぬ愛着を感じていたように思われる。このことは、1742年パリーにおもむいた時「15ルイの現金と自作の喜劇ナルシスと音楽上の新発明とが唯一の財産であった」(Confessions, Oeuvres, I, p. 145) ことから想像されるところであるが、1747年パリーのイタリア座にその上演を依頼している事実によってもうなずかれる。もっともこの上演の依頼は拒絶されているがしかしその後(1752年) フランス座で取上げられ、舞台にのせたいという年来の希望を達しているのである。

当時待は「学問芸術論」(1750年公刊)によってその「偉大」な名声を博しつつあったが、特に「村の占者」(Devin du village)以後は名実ともにパリー社

交際の流行児として話題の中心人物となる。「村の占者」が出ると私は全くはやりっ児になってしまって、やがてパリーでも私程にもてはやされる者がいない位になった(Conf. Oeuvres, I. p.192) という彼の告白が這般の消息を物語るであろう。「村の占者」は1752年春に完成し、同年10月にはルイ15世台臨の下に御前上演の榮譽に浴している。「ナルシス」はこの年の12月に公開されるが前者の「榮譽」に反して極めて不評判であった。しかし彼は「この作品は舞台の上ではつまらぬが読み物としては確かに面白かろう」(conf. Oeuvres, I. p. 202)と考へて、翌年の1753年これを印刷し公刊したのである。その時そこにつけられた序文が所謂「ナルシス序文」である。「序文」の執筆は、「ナルシス」がフランス座で上演された1752年12月18日前後であると見られる。

㊦ 「序文」執筆の動機

そもそもこの「序文」は内容的に「ナルシス」とはほとんど関連がない。「序文」の冒頭にも、「ここで問題にするのは私の作品についてではなく、私自身についてである」(Oeuvres, III. p. 192)と述べている。このことは「序文」執筆の動機ないしは意図が何であったかを暗示しているものである。それに関して「序文」の別の個所には、「不本意ながら私は自己について語らなければならない。自己に負わされている罪を承認するか、さもなければ弁明しなければならない。」(Oeuvres, III. 192)と述べている。ここで「自己に負わされている罪」とは、「学問芸術論」に対して投げかけられた批判攻撃を意味している。「ナルシス序文」は、これらの批判攻撃に挑戦する反駁として書かれたものであった。

ところで「学問芸術論」への批判と攻撃に対するルソーの弁明と駁論は「序文」以前においてもしばしば繰返されている。例えば「レナールへの手紙」、「グリムへの手紙」、「ポーランド王への回答」、「ボルド氏への最後の回答」などがそれである。それらのうち最も力強い格調でその論旨を展開しているものが「ボルド氏への最後の回答」である。これはリヨンのアカデミー院長シャルボルド(Charles Bordes)の「学問芸術の利益について」(1751年)に対する

回答として1752年に公表したものであった。懺悔録にはこのことに関して次のように記されている。(Oeuvres, I, p. 191)「彼は鄭重な態度で私を攻撃して来たので私もまた同様に回答をしたためた。すると彼は更に突込んだ調子でそれに反駁を加えた。だから私も更に最後の回答を彼に書き送った。」これによるとルソーはボルドに対して二度回答したかの如く受取られる。しかし事実はそうではない。ボルドがルソーの1752年の回答に対してその翌年(1753年)第二回目の攻撃文を書いているのは確かである。だがルソーはそれに対しては答えていないのである。したがって「最後の回答」というのはボルドに対してではなく、むしろ論敵一般に対する最後の回答を意味するものであったとも見られる。ルソー自身この「回答」を結ぶにあたって、「私は疲れたから筆をおく。そしてこの余りにも長々しい論争のためもはや再び筆を取らないつもりである」(Oeuvres, I, p. 507)と語っているのである。しかしその後間もなく「ディジョンのアカデミイ会員によるルソーの論文の反駁」と題する匿名の攻撃文が発表され、彼は沈黙を破って再び応戦している。それが「学問芸術論に対するある反駁についての手紙」である。

以上のように、ルソーは「序文」に先立って、「学問芸術論」に対する批判と攻撃にこたえていくつかの駁論をこころみている。ところでそれらは何れも特定の論敵に対する応酬にすぎなかった。もっともこれらの応酬を通して「学問芸術論」における彼の立場がそれぞれの角度から闡明されていることは事実である。しかしながら「特定の論敵」という現実の制約がその所論の展開を著しく弁明的なものに傾斜させ、それをして単なる駁論に終始せしめたこともまた否み難き事実である。そこで彼はこれら数次にわたる特定の論敵との応酬を回顧しつつ、「学問芸術論」に対する反駁の問題点をあらためて分析することによって自己の立場を更に補足布衍し、総括的にその論旨を明確に秩序づけることの必要に迫られた。この必要に応じたものが「ナルシス序文」である。したがって「ナルシス序文」は、「学問芸術論」をめぐる論争に対する彼の最も最後の結論としてもくろまれたものであった。

四 「序文」の内容

「ナルシス序文」の内容は、「学問芸術論」と一体をなし、両者は密接に関連している。周知のように「学問芸術論」は、「学問と芸術の再興は道徳(moeurs)を純化するのに寄与したか」という懸賞課題に対し否定的な結論をもって答えたものであった。即ち第一部においては学問芸術の発達と徳の衰退との関係を歴史的に考証し、第二部においてはそれを理論的に論証している。それによれば、要するに、学問と芸術はそれによって人々がつながれている鉄鎖の上に美しい花環を捧げ、彼等の生得の自由の感情を鎮圧してその奴隷状態を好むに至らしめ、かくして彼等を所謂「文明国民」(peuples policés)と呼ばれるものにつくり上げた。学問と芸術の進歩によって人々の獲得したものはいわば何らの徳をも有することなきあらゆる徳の外観のみである。すべての「物知り」である国民には名誉とか徳という「美しい観念」はあるが、彼等は必ずそれに対する愛とそれの実践を失っている。学芸の光が我々の地平線に上って来た時、徳がその姿を消したのである。そもそも学問と芸術は、その誕生を我々の悪徳に負っている。だから我々の魂は、学問や芸術が完成に向って進むにつれて腐敗する。「生活の便宜が増進し、芸術が完成に向い、奢侈が広まるにつれて真の勇氣は弱められ、軍事の徳は消え失せる」(Oeuvres, I. p. 472)とも彼はいつている。彼にとっては、「奢侈、紊乱、奴隷状態は、何時の時代にあっても、永遠の叡智が我等をおいた幸福な無知から抜け出るために我等が試みた傲慢な努力に対する懲罰であった。」(Oeuvres, I. p. 496)

学問芸術の進歩発展が道徳を純化するのに寄与しなかったという右のような「学問芸術論」における基本的観点は、「ナルシス序文」においても一貫して固執されている。この基本的観点に立脚しながら、彼が「この問題に関して公表した様々の著作において証明しようとした真理」(Oeuvres, III. p. 196)が何であったかを論究解明しようとしている。彼は先ず「学問芸術論」の主題に立ちかえて、学問と芸術の再興が我々の道徳を純化するのに寄与したか否かを明らかにすることが、自己の取組む中心課題であったことを確認する。そして我

々の道徳が純化されていないことを示すことによって問題はほぼ解決されたと見る。しかしそれは暗黙のうちに今一つの更に一般的且つ重大な問題—学問の修得があらゆる場合において国民の道徳に及ぼすべき影響に関する問題を含んでいた。この問題こそ実は彼が「綿密」に検討しようとしたところのものであったが、彼は「学問芸術論」においてそれが既に歴史的考証と両者における必然的連関の論証によって追究されたことを訴えつつその論調の姿勢を更にととのえている。

「序文」において説くところによれば、一国民のうちにおける「文学」(lettres)への好尚は必ずその国民の腐敗を告知するものである。何故ならば、この「好尚」は二つの「悪しき源泉」—無為と衆にぬきんでようとする欲望—のみから生ずるからである。そしてそれを更に維持拡大するものは「研究」(étude)である。(「学問芸術論」において「学問」(sciences)と「芸術」(arts)が道徳を頹廢させたといっていることを「ナルシス序文」においては「研究」と「文学」への好尚が道徳を頹廢させたと表現している。)そもそも「最初の哲学者達」は人々に義務の実践と徳の原理を教えることによって大きな名声を勝ち得たが、やがてそれらの教訓は尋常のこととなり、衆にぬきんでた者となるためには反対の道を切り開く必要がおこった。これが例えばかのプロタゴラス等に見られるあの「馬鹿げた教説」の起原である。こうした教説の恐るべき結果は、「義務の蔑視」という現実として現前している。哲学者にとっては「家庭」とか「宗教」とか「祖国」とかいう名辭は意味のない言葉である。彼等は「市民」でもなければ「人間」でもなく「哲学者」なのである。かくして彼は「文学、哲学、芸術への好尚が我々の第一の義務と眞の榮譽とへの愛を絶滅した」(Oeuvres, III. p. 194)と嘆き、学問と芸術の修得は我々の魂を「矮小」にしその心情を「腐敗」させたと訴える。ここで我々の特に指摘しておかなければならない点が二つある。一つは無知の称揚であり、今一つは徳の礼讃である。既に触れたように、彼は「学問芸術論」においてもまた「ナルシス序文」においても、いたるところにおいて学問をそしり、無知をたたえ、「研究」に対する侮蔑をはげしい言葉で書き立てている。かかる無知の称揚が人々に少なからざる疑惑と誤解を抱かし

めたことはけだし当然のことであろう。論敵の反駁もまたここに焦点づけられている。しかしながら、いうまでもなく彼は決して学問と学者を放逐して再び原始の野蛮状態にかえろうとしているのではない。このことは「ボルド氏への最後の回答」において、「私は現存の社会を顛覆したり、図書館や一切の書籍を焼却したり学院やアカデミィを破壊したりすることを提唱しているのではない」(Oeuvres, I. p.507)と語る言葉によっても明瞭であるが、「ナルシス序文」にはそれが更に強い語調で次のような辞句で表明されている。「私はかつてかかることをただの一言もいったことはないし、また考えたこともない。彼等が親切にも私に負わせているかかる馬鹿げた教説くらい私の主義に反するものを想像することはできない。」(Oeuvres, III. p.194)

学問をそしり無知をたたえるのは、学問が道德の腐敗を随伴するからである。学問の進歩と道德の変貌のあゆみを対照して考察する時、各国民の栄えた時代一徳の時代は、彼等の無知の時代であった。しかし国民は学者、芸術家、哲学者となるにしたがって良風と廉潔を喪失した。これは彼があらゆる機会に繰返して説くところの一貫した論旨である。ところで彼が「我々の道德が腐敗した」という場合、そのすべてを学問の進歩に帰せしめようとしているのではない。我々には無数の腐敗の源泉があることを彼も卒直に認めている。したがって彼においては、「学問は恐らくその最も流れゆたかなそして速やかな源泉ではあろうが、それが唯一のものではなかった」(Narcisse, Oeuvres, III. p.194)のである。だから「学問芸術論」の本論を敘述するに当たっても、自己の立脚点を闡明して「私は学問を冷遇するのではなく、有徳な人々を前にして徳を弁護するのだ」(Oeuvres, I. p. 464)といっているのである。むしろ彼は学問研究の意義を積極的に肯定して、「ナルシス序文」には次のように説いている。「真理を包むヴェールを透してうかがうことのできる若干の嵩高な天才、愚かな虚栄心、卑しい嫉妬、その他文学への好尚が生み出すもろもろの情念に抗することのできる若干の選ばれた魂、そういうものの存在することは私も認める。幸にもこれらの資質を併せ有する少数の人々は人類の光明であり、名誉であって、ひとり彼等こそあらゆる人々の幸福のために研究にたずさわることがふさわしい

のである。』(Oeuvres, III. p.196)

右の言葉からも容易に推察されるように、「学問芸術論」は全編ことごとく徳の頌歌であるといっても過言ではない。それは結論にうたう次の言葉によって最もはっきりと読取ることができる。「おお素朴な魂の崇高な知識たる徳よ汝を知るには一体それ程多くの労苦と道具立てとが必要なのであろうか。汝の原則は万人の心のうちに刻まれているのではないか。そして汝の掟を学ぶには自己を省み、情念を鎮めて、良心の声に耳を傾けることで十分ではないのか。ここに真の哲学が存する。我々はそれをもって満足することを知ろう。』(Oeuvres I. p.476)「ボルド氏への最後の回答」においても、「人類と徳とへの愛のみが私に沈黙を破らせた」(Oeuvres, I. p. 507)と結んでいる。彼によれば昔の政治家は絶えず風俗と徳について語ったが、我々の政治家は常に商業と金銭についてのみ語っている。しかし国家にとって輝やかしく一時的であるのと有徳で永遠的であるのと何れが重要であろうか。彼のこうした立場は「ナルシス序文」においても堅持されていることはいうまでもない。思うに既にコバン (A. Cobban)なども指摘するように、彼の最初の関心事は「道徳的なもの」であり彼はモラリストとして出発する。そして道徳によってやがて政治に導かれる。この転回点の一つを我々は「ナルシス序文」において見出すことができる。

一体、学問、芸術、奢侈、商業、法律等は個人的な利害をもって人々の間に社会への結びつきを緊密にし、すべての人間を相互依存の状態におき、彼等に交互の必要と共同の利害とをもたらし、各人をして自己の幸福を得るためには他人の幸福に協力せざるを得ないようにしている。このような「きずな」を我々の著作家達はすべて我々の世紀の「傑作品」であると見なしている。成程確かにその理念は美しい。しかし「互に先を争い、奪い合い、欺き合い、裏切り合い、ほろぼし合うことなくしては共に生きることの不可能な状態に人間を陥れたというのは何とすばらしことではないか。』(Narcisse, Oeuvres, III. p.195) 人々はこのような事態において、成功するためには他の人々を欺きまたはほろぼす以外に方法をもたないのである。人々は他人の名声のためにつくすと装いながら、実は他人の犠牲において自己のそれを築きあげようとしているにすぎない。

何れにしても「文明国民」として我々の獲得したものは、「徳」と「常識」(sens commun)の敵であるところの「饒舌」、「富者」、「理窟家」である。その代償として我々は「無邪氣」(innocence)と「良風」を失った。その結果群衆は悲惨な状態の中で這い廻っている。

ここで彼は社会の制度に目を向け、制度の悪弊をついている。そして「何と奇怪ないまわしき制度であろう」(Oeuvres, III. p.195)とそれに対して呪詛の言葉を吐きかける。そこでは蓄積された富がたえずより巨大な富を蓄積する手段を容易にし、何も持たぬ者が何らかのものを所有することを不可能にしている。こうして「善良なる者」が貧困から免かれる一切の手段は剥奪される。最も狡猾な者が最も崇められ、「紳士」となるためには是非とも徳を捨てなければならない。「ポーランド王への回答」の中でも説くように、彼においては悪の最初の源泉は不平等である。この不平等から富が結果し、富から奢侈と無為が生ずる。そして奢侈からは芸術が、無為からは学問が生れるのである。ともかく以上のようにして彼はもろもろの不平等の根拠を社会における制度に求める。それは政治にかかわる問題である。懺悔録の告白を信憑するならば、彼はかなり以前において、すべてのものが根本的には政治につながるということを見識していた。(Oeuvres, I. p. 211)しかしその自覚は、「学問芸術論」においては未だ明確な姿態をとって思想の表面には現われていない。もっとも我々はその中で、「すべての悪習は才能の差別と徳の蔑視によって人間の間に通き入れられた忌むべき不平等からではなくて何処から生ずるか」(Oeuvres, I. p. 474)というような言葉を聞くことができる。(前掲「ポーランド王への回答」の言葉もこれに関連するものであるが、)彼はここで何人も最も学識のある人として(有能な士としてさえも)、選ばれた者となることはあり得ないことを明らかにしている。けれど「学問芸術論」は、その執筆に当たっての感動を伝えたマルゼルブへの手紙によっても推察されるように、(Second Letter to M. de Mal-
esherbes, Jan. 12, 1762)それは単なる文明論ないしは文化批判ではなくして、その根基において同時に社会に対する「抵抗」が意識されていた。だがそこでは社会や政治の問題は一応背景に斥けられていわばその上部構造としての文化の

問題に主たる関心と注意が注がれている。この文化の問題を真正面から社会や政治に基づけて眺めたものが「不平等論」であったと見ることができる。しかし「学問芸術論」と「不平等論」との中間に位置して両者を媒介しているものが「ナルシス序文」である。例えば「ナルシス序文」も「学問芸術論」をうけて「不平等」の問題に閑説しているが、ここでは「よく組織された国家においては一切の市民は全く平等である」(Oeuvres, III. p.194)と説くことによって「不平等論」への接近を明示しているのである。しかも注目すべきことは、「すべての不正が悪しく導かれたものとしての人間にのみ属する」(Oeuvres, III p.195)という命題である。この命題は明らかに後期の著作に全面的に展開される人間の本来的善性の思想と、「自然が人間を幸福且つ善良につくったがしかし社会(制度)がそれを墮落させ不幸にしている」(Rousseau juge de Jean-Jacques, Oeuvres, IV. p. 131)という彼の根本観念を包蔵しているものである。

人間の自然的善性の思想は、「学問芸術論」においては必ずしも明確にされていない。むしろそこでは人間の性は本来邪悪なものであったときえ見られている。我々はそれを「人間性は根本においてさほど善いものではなかった」(Oeuvres, I. p.465)という言葉によっても知ることができるが、彼はより端的に「人間は邪悪である。彼等ほもし不幸にも学者として生れたならば、尚一層邪悪であったであろう」(Oeuvres, I. p.469)と述べているのである。そして論敵が「人間は生れつき邪悪なものであるから、学問がその光明をもたらさなかった所では彼等は熊のように純粹に動物的な生活を余儀なくされ、野蛮と悲惨のうちに沈倫していたであろう」(Bordes, Oeuvres, I. p.498)と攻撃した時、彼は「ホルド氏への最後の回答」の中で次のように答えている。「論者は太古の人間は悪しきものであったと主張する。ここから人間は生れつき悪しきものであるということが出て来る。しかしこのことは軽々しく取扱われるべき問題ではない。」(Oeuvres, I. p.499)ここで彼はこれ以上立ち入ってこの問題には触れていないが、註解として、「しかし十分注意しなければならないことは、私の信じているように、また仕合せにも私の感じているように、人間は生れつき善なるものである」(Oeuvres, I. p.500)と補足している一文は注目すべき言葉であ

る。即ち人間の自然的善性に関する思想は、「ボルド氏への最後の回答」の中で一応の形態をととのえはじめている。しかし造物主の手を出る時は善であった人間が、何故に「人間」の手にわたる時不正をなすのか。彼においては世界における悪の存在が神の正義と矛盾しないし、悪に対する一切の責は神に帰属させられない。しからば人間における不正の存在は、その責を誰が負うべきものであろうか。「ボルド氏への最後の回答」においては、それに対する解答を聞くことができない。しかしそこで成長した人間の自然的善性に関する思想は、「ナルシス序文」においては、「すべての不正が悪しく導かれたものとしての人間にのみ属する」と表現することによって、すべての不正の根源が社会(制度)に存することを明らかにしている。これが賢明な人々の考察に委ねるために提示したすべての真理のうちで、「最も驚くべき、最も残酷な真理」(Narcisse Oeuvres, III. p.195)であった。彼の生涯における思想的遍歴は、実はこの真理の解明をめぐる苦難の道程であり、「不平等論」以後の著作においてそれが徹底的に追究されるが、そこに結実する思想のいくつかの酵母が既に「ナルシス序文」においてきわだって醗酵しつつあったのである。